

## 乾燥前処理としての葉枯らし法の検討(2)

### －ヒノキの葉枯らし効果－

見尾貞治・河崎弥生・金田利之

#### 1. はじめに

人工乾燥の前処理としての葉枯らしの効果について、昨年度に引続き検討した。前回の結果では、林地で処理したヒノキ材は8%程度の含水率低下しか認められず、葉枯らしの効果に疑問を残した。

今回は、日当たりと風通しのよい平地で、葉枯らし効果の実証試験を行った。

#### 2. 方法

##### 1) 供試木

平均樹高8m、胸高直径15cm程度の30年生ヒノキ6個体を供試した。

##### 2) 葉枯らし処理

供試木は1989年3月30日に伐採し、同年7月27日まで約4ヶ月間、真庭郡勝山町勝山に所在する当センター構内に存置した。地際から伐採し、葉枯らし処理用木は地上高2m以上の枝葉を全部残した。対照木として、枝葉を全部払ったものを準備した。供試木は風通しと日当たりの良い場所(日向)に置いた。但、供試木3と4は直射日光が当たらないように建物の陰(日陰)に置いた。

##### 3) 水分測定

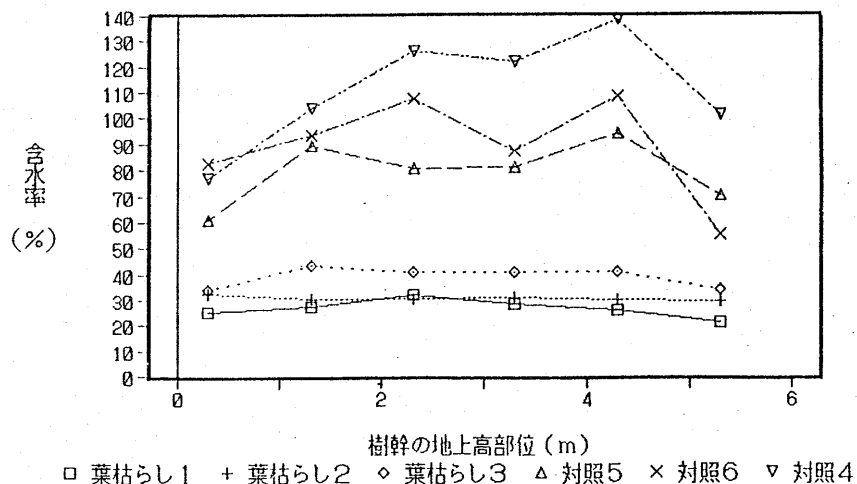
地上高0.3mから5.3mまで1m間隔で厚さ5cmの円盤を切り出し、全乾法で含水率を求めた。

#### 3. 結果と考察

風通しと日当たりの良い場所で葉枯らし処理した材は、含水率が30%程度まで低下し、日陰でも40%程度まで低下して

いる。さらに両条件とも、葉枯らし材では、樹幹内の含水率のバラツキが著しく小さくなっている。

以上の結果、水分の低減だけを目的とする人工乾燥前処理として、葉枯らしは十分に意義があると考えられる。



第1図 葉枯らし処理による乾燥効果(ヒノキ材、勝山町)